

質疑応答

以下には、三人の報告がおわったあとでの発言の一部を要約してみました。編集委員がテープからおこしたもので、発言者の検討を経ていないものもあります。紙幅の都合で省略させていただきます。いただいた部分もあることをご了承ください。

川田順造氏 落語とひとくちに言っても、昔話にしてもそうですが、いろんなジャンルの話があります。ですから、二つの話芸を全般的に比較するのではなく、もっと限定して、落語のなかには昔話ダネのものがずいぶんありますから、それを取りあげて比較してみるとおもしろいのではないかと思えます。野村純一さんご夫妻がお出しになった柳田国男の昔話に関するカードを整理されたものなかに、落語との関連についての言及がありますし、田舎でもいろいろな落し話のあったことがわかります。落語の語り口の問題にしても、たとえば昔話の「長い名の子」と同じ話型の『寿限無』の例もありますし、また『金明竹』の前半のように、やはり昔話に同型

のものがある、教えられたとおりをくり返して失敗する「一つ覚え型」の話もあります。これは狂言の『骨皮新発意』とも同型の話です。さらに『松山鏡』のように、昔話と能と落語に共通しているテーマのものを取り上げて比較分析してみるのもおもしろいのではないかと思えます。

福田晃氏 宮田さんのお話を小澤さんのお話と関連させて考えますと、本格昔話と落語を比較するのは、問題を発見させることにはなるかもしれないが、やや無理があるという気がいたします。民間説話と落語との大きな落差というのは、やはり落語はあくまで民間伝承ではないということだと思います。そうした場合に、宮田さんが取りあげられた、落語に現われるいわゆる民俗的なことから、民間説話に現われるものとのあいだには、だいぶ違いがあるのではなからうかと思えます。

宮田登氏 ある作為がはたらいて素材をもとにして作っていくわ

けですから、その素材のなかに民俗的なものが散見するというのは、落語にかぎらず、あらゆる分野にあるわけです。それを媒介として都市の生活感情とか庶民の日常意識を考えるという場合に、いままのような問題が出てくるのではないかと思います。これはたしかにインフォーマントが代々伝える民間伝承ではなく、すでに第三者が、しかも咄し家とか作家とかのインテリが介在しているわけですから、それは民俗資料として見れば二次資料ということになり、限界もありません。しかし、それを世間のいろいろな動きを見る場合のデータとして考えるという点では、あきらかにフォークロア自身の変改なり、一つの主観的な意図にもとづく再編成を前提にしなから、これがフェイクロアからフォークロアになりうるという見通しの上で考えざるをえない。だから、これを最終的な根本資料と見ないところに、逆に自由自在にあつかえる素材になるということがあるわけです。

野村純一氏 いまの福田さんの発言にもかさなります。小澤先生は本格昔話を取り出して直接落語と比較されたわけです。けれども、この場合はむしろ昔話のなかの笑話を用いて比較された方が、具体的には、どういう違いと、一方、どういった点が似ているのか、私はそれを興味ぶかく思いました。それはともかく、いままでの落語の歴史や、もしくは寄席のはやってくる状況を考えてみますと、宮田さんが指摘されたように、農村人口がかりにいくら増大したとしても、農村では落語や寄席は成立しません。漁村でも同様でしょう。それはどこに原因があるかという点、落語というのはそもそもが笑いを商品化したものであろう。すなわち笑いが商品化されているか

ら落語になるのだ、と私は思います。つまり農村とか漁村というようなフォークロリックな場面では、笑いは客観化されないし、商品化される余地がないのではないかと。したがってこれを逆に言うと、さきほどは実演をしてくださったわけですけど、いったいどのような条件がみたされたら笑いが商品化されるのか。そういうことをプロの方はどう考えているのか。もう少し言うとき昔話のなかの笑話の語り手はいかに上手な語り手であっても、笑いを商品化していい点で落語家とは決定的な違いがあるのではないかと思います。

小澤俊夫氏 さきほど川田さんからもご指摘がありましたように、落語のタネが笑話の方に多く入っている点で、それを調べてみたらどうかという点は、つぎの自分の課題として考えてみたいと思います。私としては、落語のなかにもかなり長い時間のかかるものがあるわけで、それを本格昔話と比較してみてもうかがいをまず調べてみたかったです。

小澤幹雄氏 落語というのはたしかに笑ってくださればそれにこしたことはないのですが、笑ってくださらないともいいという部分もあることはあります。プロの方はそんなのききなことを言うてはおられないのでしょうか。今日やった『舟徳』なんかは、笑わせたいと考えるよりは、話自体がたいへんおもしろい。それから船宿の人たちも、船に乗った二人のお客も、みんな真剣であって、それを客観的に聴いているとシチュエーションがおかしいわけです。だから笑わせるだけが落語ではないと思っています。

宮田登氏 笑いの商品化という点、バレ話のような笑いを求める部分と、全体が真剣そのものであるにもかかわらず、いま話された

ような滑稽感があつて、それが腹の底から出て来て、声にならなくともそれで満足するような笑いというものがあつて、私は今日の話のために、野村純一さんの「うそ話の主人公」という論文を読んできましたが、そこに出てくる主人公は、村のうそ話の主人公であると同時に語り手でもあるという説のべられていて、ああいう人たちはたしかに笑わせるということ無理にはしないのでしょうか、それ自身で笑いをひき起こすようなシチュエーションが村の生活のなかに必要であつたことはたしかです。それが商品にはなつていないけれども、それで村の英雄になつたりして存在理由が十分あつて、しかも主人公と語り手が一致しているケースなのです。ところが都会のなかのうそ話を語るのは、使用人がそのまま咄し家になるようなケースでなくて、完全にインテリがストーリーを作つて現実として展開させる話であつて、あきらかに次元がちがつています。ところが寄席というところで、興行師が介入してくることになると、商品価値うんぬんということが出て来て、どうしても笑わせなくてはいけないのでバレ話が話題になつてきて、都市の需要というものが生まれてくる。このように笑いを提供することが職業として成り立つたことを、柳田国男さんは悲劇だとしたわけですが、逆になそれを職業として成り立たしめた歴史的な必然性を、もっと究明する必要があるのではないかと思ひます。

関敬吾氏 昔話のなかに笑話というものがあつて、笑話というものはいったい何かということ、よく考えてみなくてはいけない。それから、落し話というものがあつて、落語というものが落し話ではないかとも考えられる。そうすると語り手というものは、聞き手

を無意識のうちに穴のなかに落すんじゃないかと思ふ。そこに第三者がいて、それに引つかかつて笑う。そこで私もよく考えるのだけれど、笑話と落し話をどのように区別するか。それからほかの昔話にもいわけゆる笑いはいくらでもあるが、それとはどういふ関係になるか。定義ではおかしいから笑うと言うけれど、いったいおかしいというのは何かということになる。それは聴く方がおかしいのか、話す方がおかしいのか、そのところがわからぬ。だから、わなにかけて引つかかつてくれば、話す方がおかしいことになる。結局、語り方の技術の問題になるのではないかと思ふ。おかしいのか、おかしくないのか、状況によつて非常に違ふのではないか。田舎でかかしのと、東京で落語でかかしのとは違ふのではないか。いかがでしょうか。ヨーロッパあたりのものを読んでも、よくわかりません。このような問題が学会でとりあげられたのは最初ではないかと思ひますので、もう少しつきつめていくべきでしょう。私ももっと考えてみたいと感じています。